熊本県立松橋西支援学校（本校） 令和元年度（2019年度）学校評価表

<p>1 学校教育目標</p> <p>心豊かでたくましい児童生徒の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 心豊かであるということ <ul style="list-style-type: none"> ・ 優しく思いやりがあり、自然や周囲の人を大切にすることができる。 ・ 自分の好きなことを見つけ、感性豊かに感じ取ったり表現したりできる。 ・ 友達や教師と積極的にかかわり、気持ちを重ね合わせながら活動できる。 ○ たくましいということ <ul style="list-style-type: none"> ・ 自ら健康に気をつけ、体力を高めながら元気に毎日を過ごすことができる。 ・ 困難さを感じても、自己肯定感を元に挑戦する意欲を持つことができる。 ・ 自らの生活に目標を持って、積極果敢に取り組むことができる。

<p>2 本年度の重点目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 児童生徒一人一人の教育的ニーズを踏まえた指導の実践 <ul style="list-style-type: none"> ・ 新学習指導要領の内容をふまえた教育課程の検討・充実(教務部) ・ 課題分析力の向上及び個に応じた自立活動の充実(研究部) ・ 運動の日常化及び体力向上に向けた授業実践の検討・充実(保健体育部) ・ 児童生徒の支援の充実に向けた校内のケース会議システムの構築(教育支援部) ○ 安全安心な教育環境の整備 <ul style="list-style-type: none"> ・ 安全な登下校指導及び関連機関との連携(生徒指導部) ・ 学校全体の防災意識、防災対応能力の向上(防災安全部) ○ 進路指導の充実 <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒の能力や希望に応じた進路指導の充実、適切な情報提供(進路指導部) ○ ICT活用の充実 <ul style="list-style-type: none"> ・ ICT機器を活用した授業づくりと職員による情報の共有・活用(情報部)
--

3 自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	「和して同じない」教師集団づくり	・切磋琢磨し高め合う職員集団 ・風通しが良く、意見を言い合える職場環境	・研究活動等を通して互いの実践力を存分に高め合う。 ・指導グループや学部で課題を共有し、積極的に意見を交わす。	・職員の知見を広げられるよう、外部講師の活用等を積極的に行う。 ・必要に応じて管理職もグループの話し合いに参加して意見交換を行う。	B	・全学部で研究授業や授業研究会に熱心に取り組んだことで、学校全体の実践力向上が図られた。 ・折に触れて「和して同じない」を職員に意識付け、立場によらず意見を言い合える職場環境づくりを進めた。
	子どもと向き合う時間の確保及び教職員の心身の健康の保持増進を目指した業務改善	・業務の精選と効率化 ・時間外勤務時間削減	・部長や担当者に業務が集中しがちな部署の役割分担を整理する。 ・強化月間を設けて集中的に削減を図る。	・教務部と生徒指導部の業務を階層化し、部門担当者を明確にする。 ・施設時数設定やアフター5デイ実施の徹底を図る。	B	・業務の階層化を図った分掌部では担当者の分業意識が高まった。 ・強化月間(6月)には一定の削減が図られた。職員の意識によって一時的な改善はあるが、学校全体で業務の平準化を進めるなど根本的な見直しが不可欠である。
授業の充実	新学習指導要領の内容をふまえた教育課程の検討・充実	・教育課程検討委員会及び学部検討の計画的な実施	・新学習指導要領の内容をふまえ、教育課程を検討する。	・昨年度、各学部で作成した年間指導計画を、各教科内容表を活用して点検し、見直しを図る。 ・教育課程に関するアンケートを実施し、改善の資料とする。	B	・教育課程アンケートの結果をもとに、新学習指導要領の内容をふまえながら、計画的に次年度の教育課程を検討することができた。
	課題分析力の向上及び個に応じた自立活動の充実	・中心課題から導き出した指導目標の設定 ・具体的な指導内容の設定	・実態把握から指導内容設定までの流れをふまえた個別の指導計画を作成する。	・実態把握から指導内容設定までの流れを理解できるシートを作成する。 ・グループで検討を行い、経験差をカバーする。	B	・実態把握から中心課題を導き出し、指導内容を設定するまでの手続を理解することができた。質の高い課題分析と適切な目標設定については今後も継続して取り組む。
	運動の日常化及び体力向上に向けた授業実践の検討・充実	・児童生徒が興味関心を持つ種目の選択 ・体の動きを高め、実生活に生かす運動の実施	・ハンドボールやラグビーなどを取り入れる。 ・体力テストの結果を考慮して必要な運動を計画する。	・児童生徒が取り組みやすい内容やルール等を用意する。 ・グルーピングを行い、児童生徒に適した動きを準備する。	B	・ルールを分かりやすくしたことで児童生徒がそれぞれの球技に取り組むことができた。昼休みなど自主的に球技に取り組む児童生徒が増えた。 ・体力テストは高等部のみ実施した。生徒の運動能力に合わせた活動を設定したことで生徒一人一人が十分に運動を行うことができた。

	ICT機器を活用した授業づくりと職員による情報の共有 ・活用	・ICT機器の授業への活用促進 ・本校と分教室との情報共有システムの構築	・教材作成の方法、機器の使用法、トラブル対処方法等の周知を図る。 ・利用しやすいシステムを作り、円滑な情報共有ができるようにする。	・職員の授業での活用意欲を高めるような研修内容を検討し、実施する。 ・共有ディスクやフォルダの整理をし、利用上のルールを整備する。	B	・ICT機器を活用した授業については、今後も更に活用を推進し、教材作成や使用法等を職員間で共有できるようにしていく。 ・引き続き文書セキュアシステム等を利用するなどして、情報共有システムの構築を図っていく。
キャリア教育(進路指導)	児童生徒の能力や希望に応じた進路指導の充実、適切な情報提供	・キャリア教育の具体的な実践・推進	・キャリア教育の実践例を職員に分かりやすく紹介する。	・進路だより、アフター情報を定期的に発行し、キャリア教育についての情報発信を行う。	B	・進路だよりは月1回発行できた。内容的に現場実習や福祉制度の話が多かった。今後は、もっと生き方支援(キャリア教育)に関与づけた内容構成を検討したい。
生徒(生活)指導	安全な登下校指導及び関連機関との連携	・児童・生徒の安全・確実な登下校の保証	・自力通学生に対する登下校指導と通学路の安全確認を徹底する。 ・通学バスや事業所の校内への安全な乗り入れの体制を整える。 ・児童・生徒の通学バス停留所から事業所への安全で確実な引継ぎを行う。	・定期的な登下校指導、通学路の安全確認、交通安全教室を実施する。 ・許可証発行手続きを通じて、バス会社や事業所とルールの徹底や支援方法の共通理解を図る。 ・学校に乗り入れのない事業所に対して、利用実態の把握を行い、引継ぎ証を発行する。	A	・各学部で交通安全教室を実施し学期初めや通学方法の変更があった際は登下校指導を実施した。 ・バス連絡会や放デイ連携会を通して児童生徒の支援に対する情報共有や入校手順の確立を行った。 ・利用実態を把握し、全事業所(10)に対して引継ぎ証を発行し、停留所での確実な引継ぎを行った。
人権教育の推進	児童生徒の人権を大切にした教育	・人権教育の視点を大切にした授業づくり	・人権教育の視点を大切にした教育実践と振り返りを行う。	・「人権尊重の視点を大切にした授業づくり」について、研修を行う。 ・小学部から高等部までを見通した人権学習の年間指導計画を作成し、計画に基づいた実践を行う。 ・全職員による人権教育レポート研修を行う。	B	・年間指導計画に基づいて人権学習を実施したことで、小学部から高等部までの学習のつながりを意識しながら、育てたい力を明確にして取り組むことができた。 ・「人権尊重の視点を大切にした授業づくり」について、1回の研修では職員の意識や技術向上は難しかった。
いじめの防止等	いじめの早期発見・未然防止に向けた取組及びいじめ問題への対応	・児童生徒の細やかな実態把握と様子観察 ・いじめ問題に対する迅速で組織的な対応	・従来のいじめの形態に加え、インターネットやSNSを介したいじめについて実態把握と職員研修を行う。 ・速やかに情報収集、事実関係の整理、当該児童生徒への的確な指導・支援を組織的に行う。	・心のアンケート(抜粋版)の質問項目を増やし、SNS等の使用状況について年3回のアンケートを実施する。外部講師を招聘して、「インターネットと人権」について職員研修を行う。 ・年3回の「いじめ防止対策推進委員会」や「いじめ問題対策委員会」を適宜開き、迅速かつ組織的に対応する。	A	・職員研修を通してネット社会の現状や実践に触れ、現状認知や課題意識の高まりに繋がった。いじめに対する取組の情報発信やスマホ、SNSの使用実態について細やかな把握の必要性がある。 ・いじめに発展しそうな細かな情報や気づきに対して、各学部や各委員会を通じて迅速かつ組織的に対応することができた。
地域支援	地域における支援体制の充実	・担当エリア内の巡回相談及び近隣の地域への対応 ・特別支援教育に関する指導力向上研修の開催	・巡回相談及び来校相談や就学相談等に適切に対応する。 ・管内の小・中・高等学校教員を対象に研修を実施し専門性の向上を図る。	・相談依頼校との日程調整を行う。巡回相談の依頼がない学校には電話での状況確認を行う。 ・上益城教育事務所、松橋東支援学校と連携し、計画、運営、報告等を適切に行う。	B	・小学校、中学校、高等学校からの巡回相談では依頼内容に応じて対応できた。依頼の無かった学校へは電話連絡で状況を確認した。また、就学相談に適切に対応することができた。 ・各関係機関と連携し、計画どおりに研修を開催することができた。多くの参加者から満足できたとの評価があった。
	児童生徒の支援の充実に向けた校内のケース会議システムの構築	・学部ケース会議、校内ケース会議を段階的に実施する。	・普段からの情報収集と、ケース会議の実施に向けた日程調整及び準備を迅速に行う。	・学部内での気づきの共有と、ケース会議を見据えた定期的な情報共有が行えるよう働きかける。	B	・9月以降に定期開催した「校内支援委員会」の中で、各学部のケースについて協議を行い、具体的な手立てについて協議することができた。学部内での情報共有と必要に応じてケース会議の実施を呼びかけ実施した。
地域連携(コミュニティ・スクールなど)	学校全体の防災意識や防災対応能力の向上	・災害時対応の共通理解	・地域や近隣校との合同訓練を実施し、つながりを深める。	・地震津波訓練等地域の方々に呼びかけ、合同訓練を行う。 ・3校で連絡体制確認のための合同訓練を行う。	B	・日頃の交流活動を通じた地域とのつながりに支えられ、合同避難訓練もスムーズに実施できた。 ・近隣学校との連絡訓練も継続して取り組むことで、防災体制の確認を行うことができた。

4 学校関係者評価

- ・ 働き方改革が求められる中、限られた時間で充実した授業づくりが行えている。子どもたち一人一人の特性について共通理解を図るのは時間の確保が難しいと思うが、よくがんばっている。
- ・ 小学部から高等部まで、キーワードはコミュニケーション。社会に出たら最も大切なことなので、ぜひコミュニケーション力の向上につながるような取組を行ってほしい。
- ・ 学校評価の結果は引継ぎを行って、確実に次の年に繋げてほしい。
- ・ 良い点も悪い点も意見を言い合えるようになってほしい。組織として風通しが良くなければならない。風通しが良い組織、向上心がある組織は伸びる。

5 総合評価

- ・ 本年度は「めざす学校の姿」として「発展する学校」を新たに掲げ、学部や各分掌部が目標達成に向けて丁寧に成果を積み上げていくことで、着実に発展を遂げることを目指した。各分掌部からそれぞれ中心的課題を出し合い、それを本年度の重点目標とするとともに、各評価項目にストレートに反映させた。分掌部業務のPDCA化が図られ、年間を通してそれぞれの成果を得ることができた。
- ・ 重点目標のうち「児童生徒一人一人の教育的ニーズを踏まえた指導の実践」については、特に自立活動の充実に力を入れて取り組み、全学部で研究授業を実施して毎回全職員による授業研究会で協議を行うなど、充実した授業実践のために全職員で力を合わせて取り組み、実践力を高めることができた。その他「安全安心な教育環境の整備」「進路指導の充実」「ICT活用の充実」いずれも充実化を図ることができた。
- ・ また本年度は、「めざす教師の姿」として「和して同じない教師」を新たに掲げた。風通し良く意見を言い合える職員集団であることを目指し、折に触れて職員に意識付けを行った。学校文化として根付かせるには更に時間を要するが、切磋琢磨し互いを高め合えるよう、引き続き取り組んでいきたい。

6 次年度への課題・改善方策

- ・ 教育現場にとって大きな課題となっている働き方改革については、業務の精選と職員間の平準化が喫緊の課題だが有効な打開策を講じるには至らなかった。今年度は業務の階層化を取り入れて一定の成果を得たが、職員の時間外勤務時間を大幅に縮減することは難しく、職員一人一人の意識改革を進めながら、大胆な業務整理の検討を行う必要がある。
- ・ 今年度取り組んだ全学部での研究授業及び授業研究会では、職員全員が他学部の授業にも関心を持ち、積極的により良い授業づくりのために知恵を絞る機会となったことで、学校全体の活性化につながった。次年度も引き続き取り組み、学校全体の授業力向上を図りたい。
- ・ 高等部移転に向けた検討を進める中で、新たな時代に即した知的障がい特別支援学校の在り方を描いていきたい。高等部に限らず、小・中学部及び高等部上益城分教室についても、地域との連携を一層強め、地域に根ざし、地域に学ぶ、開かれた教育課程・学校づくりを検討していきたい。

熊本県立松橋西支援学校（高等部上益城分教室） 令和元年度（2019年度）学校評価表

<p>1 学校教育目標</p> <p>心豊かでたくましい児童生徒の育成</p> <p>○ 心豊かであるということ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・優しく思いやりがあり、自然や周囲の人を大切にすることができる。 ・自分の好きなことを見つけ、感性豊かに感じ取ったり表現したりできる。 ・友達や教師と積極的にかかわり、気持ちを重ね合わせながら活動できる。 <p>○ たくましいということ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自ら健康に気をつけ、体力を高めながら元気に毎日を過ごすことができる。 ・困難さを感じても、自己肯定感を元に挑戦する意欲を持つことができる。 ・自らの生活に目標を持って、積極果敢に取り組むことができる。
--

<p>2 本年度の重点目標</p> <p>○ 児童生徒一人一人の教育的ニーズを踏まえた指導の実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新学習指導要領の内容をふまえた教育課程の検討・充実(教務部) ・課題分析力の向上及び個に応じた自立活動の充実(研究部) ・運動の日常化及び体力向上に向けた授業実践の検討・充実(保健体育部) ・児童生徒の支援の充実に向けた校内のケース会議システムの構築(教育支援部) <p>○ 安全安心な教育環境の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安全な登下校指導及び関連機関との連携(生徒指導部) ・学校全体の防災意識、防災対応能力の向上(防災安全部) <p>○ 進路指導の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の能力や希望に応じた進路指導の充実、適切な情報提供(進路指導部) <p>○ ICT活用の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器を活用した授業づくりと職員による情報の共有・活用(情報部)

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	「和して同じない」教師集団づくり	・切磋琢磨し高め合う職員集団 ・風通しが良く、意見を言い合える職場環境	・研究活動等を通して互いの実践力を存分に高め合う。 ・指導グループや学部で課題を共有し、積極的に意見を交わす。	・職員の知見を広げられるよう、外部講師の活用等を積極的に行う。 ・必要に応じて管理職もグループの話し合いに参加して意見交換を行う。	B	・全学部で研究授業や授業研究会に熱心に取り組んだことで、学校全体の実践力向上が図られた。 ・折に触れて「和して同じない」を職員に意識付け、立場によらず意見を言い合える職場環境づくりを進めた。
	子どもと向き合う時間の確保及び教職員の心身の健康の保持増進を目指した業務改善	・業務の精選と効率化 ・時間外勤務時間削減	・部長や担当者に業務が集中しがちな部署の役割分担を整理する。 ・強化月間を設けて集中的に削減を図る。	・教務部と生徒指導部の業務を階層化し、部門担当者を明確にする。 ・施設課稼働設定やアフター5日実施の徹底を図る。	B	・業務の階層化を図った分掌部では担当者の分業意識が高まった。 ・強化月間(6月)には一定の削減が図られた。職員の意識によって一時的な改善はあるが、学校全体で業務の平準化を進めるなど根本的な見直しが不可欠である。
授業の充実	新学習指導要領の内容をふまえた教育課程の検討・充実	・教育課程検討委員会及び学部検討の計画的な実施	・新学習指導要領の内容をふまえ、教育課程を検討する。	・昨年度、各学部で作成した年間指導計画を、各教科内容表を活用して点検し、見直しを図る。 ・教育課程に関するアンケートを実施し、改善の資料とする。	B	・教育課程アンケートの結果をもとに、新学習指導要領の内容をふまえながら、計画的に次年度の教育課程を検討することができた。
	課題分析力の向上及び個に応じた自立活動の充実	・中心課題から導き出した指導目標の設定 ・具体的な指導内容の設定	・実態把握から指導内容設定までの流れをふまえた個別の指導計画を作成する。	・実態把握から指導内容設定までの流れを理解できるシートを作成する。 ・グループで検討を行い、経験差をカバーする。	B	・実態把握から中心課題を導き出し、指導内容を設定するまでの手続きを理解することができた。質の高い課題分析と適切な目標設定については今後も継続して取り組む。
	運動の日常化及び体力向上に向けた授業実践の検討・充実	・児童生徒が興味関心を持つ種目の選択 ・体の動きを高め、実生活に生かす運動の実施	・ハンドボールやラグビーなどを取り入れる。 ・体力テストの結果を考慮して必要な運動を計画する。	・児童生徒が取り組みやすい内容やルール等を用意する。 ・グルーピングを行い、児童生徒に適した動きを準備する。	B	・ルールを分かりやすくしたこと児童生徒がそれぞれの球技に取り組むことができた。昼休みなど自主的に球技に取り組む児童生徒が増えた。 ・体力テストは高等部のみ実施した。生徒の運動能力に合わせた活動を設定したことで生徒一人

						一人が十分に運動を行うことができた。
	ICT機器を活用した授業づくりと職員による情報の共有・活用	・ICT機器の授業への活用促進 ・本校と分教室との情報共有システムの構築	・教材作成の方法、機器の使用法、トラブル対処方法等の周知を図る。 ・利用しやすいシステムを作り、円滑な情報共有ができるようにする。	・職員の授業での活用意欲を高めるような研修内容を検討し、実施する。 ・共有ディスクやフォルダの整理をし、利用上のルールを整備する。	B	・ICT機器を活用した授業については、今後も更に活用を推進し、教材作成や使用方法等を職員間で共有できるようにしていく。 ・引き続き文書セキュリティシステム等を利用するなどして、情報共有システムの構築を図っていく。
キャリア教育(進路指導)	児童生徒の能力や希望に応じた進路指導の充実、適切な情報提供	・各機関と連携した進路指導の充実	・一般就労につながる現場実習先を開拓する。 ・積極的な情報の収集、共有、提供を行う。	・進路指導主事と連携し、生徒が希望する企業を中心に企業訪問をする。 ・上益城自立支援協議会や分教室会等で、情報の交換を行う。	B	・進路指導主事、キャリアサポーターと連携して、一般企業の実習先を開拓し、現場実習を実施することができた。 ・月1回会議に出席し、情報収集及び相談を行うことができた。
生徒(生活)指導	安全な登下校指導及び関連機関との連携	・関係機関と連携した交通安全指導	・警察署と連携し生徒の実態に即した交通安全指導を行う。 ・登下校方法を確実に把握し、家庭との連携を図る。	・交通安全に対する理解を深め意識が高まるよう、シミュレーション等の疑似体験を活用する。 ・通学方法調査や通学時行方不明対応シートを活用する。	B	・御船警察署の協力のもと自転車のシミュレーションを行った。その様子をモニター共有して全員で効率的に学習できた。 ・登下校の方法が変わった場合も保護者と連携し安全な登下校ができた。
人権教育の推進	児童生徒の人権を大切にした教育	・人権感覚を高めるための授業づくり	・いじめや差別について考え、理解を深めることで人権意識を高める。	・いじめ問題や、障害者差別、水俣病差別等に関する人権学習を行う。 ・甲佐町学校人権教育部会に継続して参加し、地域への理解と啓発に繋げる。	A	・学年別にテーマを設けて学習した。具体的事例をあげることで、それまで気づけなかった問題を認識でき、意識が高まった。 ・甲佐学人権部会や小中学校の研究授業、研修に積極的に参加できた。
いじめの防止等	いじめの早期発見・未然防止に向けた取組及びいじめ問題への対応	・児童生徒の細やかな実態把握と様子観察 ・いじめ問題に対する迅速で組織的な対応	・従来のいじめの形態に加え、インターネットやSNSを介したいじめについて実態把握と職員研修を行う。 ・速やかに情報収集、事実関係の整理、当該児童生徒への的確な指導・支援を組織的に行う。	・心のアンケート(抜粋版)の質問項目を増やし、SNS等の使用状況について年3回のアンケートを実施する。外部講師を招聘して、「インターネットと人権」について職員研修を行う。 ・年3回の「いじめ防止対策推進委員会」や「いじめ問題対策委員会」を適宜開き、迅速かつ組織的に対応する。	A	・職員研修を通してネット社会の現状や実践に触れ、現状認知や課題意識の高まりに繋がった。いじめに対する取組の情報発信やスマホ、SNSの使用実態について細やかな把握の必要性がある。 ・いじめに発展しそうな細かい情報や気づきに対して、各学部や各委員会を通じて迅速かつ組織的に対応することができた。
地域支援	地域における支援体制の充実	・担当エリア内の巡回相談及び近隣の地域への対応 ・特別支援教育に関する指導力向上研修の開催	・巡回相談及び来校相談や就学相談等に適切に対応する。 ・管内の小・中・高等学校教員を対象に研修を実施し専門性の向上を図る。	・相談依頼校との日程調整を行う。巡回相談の依頼がない学校には電話での状況確認を行う。 ・上益城教育事務所、松橋東支援学校と連携し、計画、運営、報告等を適切に行う。	B	・小学校、中学校、高等学校からの巡回相談では依頼内容に応じて対応できた。依頼の無かった学校へは電話連絡で状況を確認した。また、就学相談に適切に対応することができた。 ・各関係機関と連携し、計画どおりに研修を開催することができた。多くの参加者から満足できたとの評価があった。
	児童生徒の支援の充実に向けた校内のケース会議システムの構築	・学部ケース会議、校内ケース会議を段階的に実施する。	・普段からの情報収集と、ケース会議の実施に向けた日程調整及び準備を迅速に行う。	・学部内での気づきの共有と、ケース会議を見据えた定期的な情報共有が行えるよう働きかける。	B	・9月以降に定期開催した「校内支援委員会」の中で、各学部のケースについて協議を行い、具体的な手立てについて協議することができた。学部内での情報共有と必要に応じてケース会議の実施を呼びかけ実施した。
地域連携(コミュニティ・スクールなど)	学校全体の防災意識や防災対応能力の向上	・甲佐高校、地域と連携した避難訓練による意識の向上	・校内に避難手順を掲示し意識を高める。 ・月に1回、全体で手順を確認する。	・防災マニュアルの共通理解を図るとともに、視覚的に分かりやすい手順表を作成する。 ・集会時等に、手順を確認する時間を設ける。	B	・経路図と写真を掲示し、避難方法を視覚的に確認できた。 ・防災訓練に向けて手順やマニュアルの確認を行ったが、定期的な確認が不足していた。

4 学校関係者評価

- ・ 働き方改革が求められる中、限られた時間で充実した授業づくりが行えている。子どもたち一人一人の特性について共通理解を図るのは時間の確保が難しいと思うが、よくがんばっている。
- ・ 小学部から高等部まで、キーワードはコミュニケーション。社会に出たら最も大切なことなので、ぜひコミュニケーション力の向上につながるような取組を行ってほしい。
- ・ 学校評価の結果は引継ぎを行って、確実に次の年に繋げてほしい。
- ・ 良い点も悪い点も意見を言い合えるようになってほしい。組織として風通しが良くなければならない。風通しが良い組織、向上心がある組織は伸びる。

5 総合評価

- ・ 本年度は「めざす学校の姿」として「発展する学校」を新たに掲げ、学部や各分掌部が目標達成に向けて丁寧に成果を積み上げていくことで、着実に発展を遂げることを目指した。各分掌部からそれぞれ中心的課題を出し合い、それを本年度の重点目標とするとともに、各評価項目にストレートに反映させた。分掌部業務のPDCA化が図られ、年間を通してそれぞれの成果を得ることができた。
- ・ 重点目標のうち「児童生徒一人一人の教育的ニーズを踏まえた指導の実践」については、特に自立活動の充実に力を入れて取り組み、全学部で研究授業を実施して毎回全職員による授業研究会で協議を行うなど、充実した授業実践のために全職員で力を合わせて取り組み、実践力を高めることができた。その他「安全安心な教育環境の整備」「進路指導の充実」「ICT活用の充実」いずれも充実化を図ることができた。
- ・ また本年度は、「めざす教師の姿」として「和して同じない教師」を新たに掲げた。風通し良く意見を言い合える職員集団であることを目指し、折に触れて職員に意識付けを行った。学校文化として根付かせるには更に時間を要するが、切磋琢磨し互いを高め合えるよう、引き続き取り組んでいきたい。

6 次年度への課題・改善方策

- ・ 教育現場にとって大きな課題となっている働き方改革については、業務の精選と職員間の平準化が喫緊の課題だが有効な打開策を講じるには至らなかった。今年度は業務の階層化を取り入れて一定の成果を得たが、職員の時間外勤務時間を大幅に縮減することは難しく、職員一人一人の意識改革を進めながら、大胆な業務整理の検討を行う必要がある。
- ・ 今年度取り組んだ全学部での研究授業及び授業研究会では、職員全員が他学部の授業にも関心を持ち、積極的により良い授業づくりのために知恵を絞る機会となったことで、学校全体の活性化につながった。次年度も引き続き取り組み、学校全体の授業力向上を図りたい。
- ・ 高等部移転に向けた検討を進める中で、新たな時代に即した知的障がい特別支援学校の在り方を描いていきたい。高等部に限らず、小・中学部及び高等部上益城分教室についても、地域との連携を一層強め、地域に根ざし、地域に学ぶ、開かれた教育課程・学校づくりを検討していきたい。